●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成２６年 西雲寺だより　冬号（39号）

当山 御正忌報恩講のご案内

11月28日(金)～30日(日)

28日お逮夜(2時)
お初夜(7時)(武周お講)
29日お日中(10時)
大逮夜(2時)(御伝鈔)
お初夜(7時)(御伝鈔)
30日満日中(10時)

法話　福井　野世信水師
(29日より)

お誘い合わせの上
ご参詣下さいますよう
ご案内いたします

親鸞聖人のご生涯

最晩年の親鸞聖人

目も見えず

親鸞聖人も寄せくる年波には勝てず、八十六歳のお手紙のなかで

目も見えず候、何事もみな忘れて候う

と書いておられます。頑健そうに見えた聖人ではありますが、八十六歳を過ぎて身体が衰えていかれたのです。聖人も私たちと同じ、「生老病死（しょうろうびょうし）」の苦しみを味わいながらの毎日だったのです。

『歎異抄』の第九条に

なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきてちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり

というお言葉がありますが、老いの苦しみ、寂しさのなかに、お浄土へまいらせていただく日の近いことを思い、今日まで歩んできた長き人生を懐かしんでおられたことと思われます。

親鸞聖人の家族

親鸞聖人は六十二、三歳の頃、関東から家族と共に京都に戻られましたが、聖人八十二歳、妻の恵信尼（えしんに）七十三歳の頃、恵信尼は長男の善鸞、末娘の覚信尼（かくしんに）を父親鸞の元に残し三人の子供と共に、恵信尼の故郷である越後に帰ることになったのです。理由は生活のためとか、恵信尼の実家の三善家の土地や財産を管理するためだったといわれています。年老いた聖人にはつらい別れであったと思われますが、別れた家族とは深い信仰の絆がありました。

聖人は「非僧非俗の愚禿親鸞」と名のり、寺や道場のようなものは生涯持たず、京都に帰られてからも転々としておられたようですが、晩年は弟である尋有僧都（じんうそうず）の善法院にお住まいになっておられ末娘の覚信尼が身のまわりの世話をしておられました。

お手紙

聖人は老いの身をふるい立たせるように、机に向かってお聖教を写し、また自らもお聖教をお書きになられました。そして関東から尋ねてくるお弟子やお同行たちには、その問いや不審に対して丁寧にお答えになり、また送られてくるお手紙には懇切な返事を書かれました。関東のお弟子や御同行に送られたお手紙は九十二通あったといわれ現在四十二通が残されております。

聖人八十八歳のお手紙のなかに

故法然上人の「浄土宗のひとは愚者なりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いし

とあります。吉水時代に法然上人より開かれたこのことばが、親鸞聖人のご一生を貫くものとなったのです。そして聖人は関東の門弟と共に、生涯をかけてよき師法然上人の念仏の教えを聞き続けていかれたのです。

自然法爾（じねんほうに）

親鸞聖人の八十六歳のお手紙のなかに「自然法爾章」という最晩年の法語があります。「自然（じねん）」という言葉によって晩年に達した他力の境地を表わしておられるのです。この「自然（じねん）」という言葉は、現代人が使う意味とは全く違います。自然（しぜん）と読んだ場合は自然界を表わしますが、親鸞聖人は「自然（じねん）」を「おのずからしからしめる」という意味として如来の絶対他力のおはたらきを表わしておられるのです。

自然というのは、自はおのずからという、行者のはからいにあらず、しからしむということばなり、然というはしからしむということば、行者のはからいにあらず、如来のちかいにてあるがゆえに（中略）自然というは、もとよりしからしむということばなり、弥陀の御ちかいの、もとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいて、むかえんとはからわせたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを、自然とはもうすぞとききて候う、ちかいのようは、無上仏とならしめんとちかいたまえるなり。無上仏ともうすはかたちもなくましまします。かたちのましまさぬゆえに、自然とはもうすなり。かたちましますとしめすときには無上仏とは申さず。

阿弥陀仏というは、自然のようを知らせんためのすがたです。以上の道理を心得たのちには、この自然についてせんさくすべきでありません。自然とは、思議のおよばない仏の智慧なのです。

私たちは地球の引力のように、自然という如来の絶対他力のおはたらきのなかに、お念仏申さしめられ、色もなく形もない無上涅槃という仏の世界にはからわれているのです。親鸞聖人はいのち尽きるまでの長い求道を通して、煩悩具足の罪業の身を如来の絶対他力のおはたらきにまかせきることができた、はれやかな信心の世界をいただかれているのです。

末娘覚信尼の行く末を案ずる

聖人の死が近づいていた頃、末娘覚信尼は夫と死別し、子供をかかえて生活に困っておられ、老いゆく聖人にとって気がかりなことでした（聖人が亡くなった時には再婚されていた）。彼女の行く末を案じ、常陸の門徒たちに世話を頼んでおられます。

この今御前の母は頼みとするところもなく私が所領でも持っておればこそ、それを譲りもしましょうが、残念ながらそれもかないません。私が死にましたならば、どうか常陸の皆さま、この者たちを不憫に思ってやって下さい。

このお手紙は筆勢に衰えがみられ、聖人最晩年の、いわば遺言状にも相当するお手紙であります。聖人も私たちと同じく残されていく子や孫の行く末を心配しながら死を迎えられたのです。

聖人御往生

親鸞聖人は一二六二（弘長二）年十一月下旬に体調を崩されました。それからは、世間のことは口にせず、もっぱらお念仏を称えておられたと伝えられています。そして二十八日弟尋有の住いである善法院において、ついに九十年のご生涯を終えられました。臨終を見とったのは、末娘の覚信尼、越後から上洛した三男の益方（ますかた）入道、門弟では高田の顕智房（けんちぼう）、遠江の専信房（せんしんぼう）らでした。翌二十九日、東山の延仁寺（えんにんじ）で火葬にふされました。葬儀は「それがし閉眼せば、賀茂川に入れて魚に与うべし」の御遺言に基づき、質素に行なわれたようです。御遺骨は同じく東山の大谷に納めました。これは知恩院山内にある崇泰院（そうたいいん）の地で、それより五十年前、師の法然上人の御遺体を埋葬した場所のほど近いところです。

聖人の遺言として後世伝えられたものに「御臨末（ごりんまつ）の御書（ごしょ）」という歌があります。

一人居て喜ばば二人と思うべし
二人居て喜ばば三人と思うべし
その一人は親鸞なり

この歌にはお念仏の教えを聞く私たちにどこまでも寄りそう聖人の姿が見事にあらわされています。親鸞聖人は、人々とともにお念仏の教えを聞き続けていくことに、生涯を捧げられた人だったのです。

恵信尼の手紙

聖人の葬儀、拾骨とあわただしく過ぎ去った翌日の十二月一日、末娘の覚信尼は、父親、親鸞聖人の御往生を越後にいる母親に知らせました。手紙は二十日すぎに母親のもとに届きました。喪のあけた翌年二月十日、この日を待ちかねていたかのように、三通ものお手紙が恵信尼から娘の覚信尼に送られました。その手紙の冒頭に

昨年の十二月一日付のお手紙、同じ月の二十日過ぎに、確かに拝見いたしました。何よりもまず、殿がお浄土へ往生されたことはまったく疑いのないことで、あらためて申し上げるまでもないことです。

とあり、単刀直入とも思えるこの短い書き出しの言葉からは、母として、娘にだけは何としても伝えねばならないと思いさだめられた恵信尼の切実な気持が痛いほど伝わってきます。若くして夫と死別し、二人の幼子を育てながら父の身の回りの世話をし、臨終を看取り、葬儀から収骨まで、身も心も疲れている末娘から届いた手紙の最初の返事ですから、まずねぎらいの言葉があってもよさそうなものですが、愛すればこそ、何よりもまず、娘に伝えねばならない大切なことがあったのです。その大切なことは「あなたのお父さまがお浄土へ往生されたことは、まったく疑いのないことです」という、ゆるぎのない確信です。またお手紙の最後に、

殿のご臨終がどのようにあられましても、お浄土へ往生されたことは確かで何の疑いもありませんし、また、あなたと同じように益方（覚信尼の兄）もご臨終におあいになられたとのこと、親子の縁とは申しながら、よくよく深いものがあると思いますと、本当にうれしく、うれしく思います。

と書かれています。父、親鸞の死におろおろしている娘に、往生は間違いないといっているのです。そこには夫、親鸞の教えに身近に触れた恵信尼の深いお念仏の信心があったのです。そしてお手紙のなかで、かつて恵信尼は、親鸞聖人は観音菩薩の化身であるという夢を見たことを告げています。親鸞聖人もかつて京都の六角堂で観音菩薩が妻となって現われるという夢を見ておられるので、夫婦互いに、観音菩薩として敬愛しておられたのであります。

（住職）

京都東山　佛光寺本廟

母からの手紙

灯明寺町
松原　鋭

昭和三十五年三月に外航船に乗るようになり、ペルシャ湾～日本を五十日位で航海しておりました。半年経った頃、秋田県の船川港に入港したさい、父からの手紙を何通か受け取りました。その中の一通に、母の手紙が同封されており、驚きと同時に小中学生の頃の思い出が胸に込み上げてきました。

父の留守の時は、よく正信偈を称えていました。子供の頃、母の後ろに座って聞いていたものです。小さい頃から、母の字を書く姿を見たことも無く、母からは手紙が来ないものと思っていました。小さい漁船しか見た事がない母の心配と淋しさが書かれていました。たぶん何日もかかり鉛筆の芯を舐めながら書いたものと思われます。

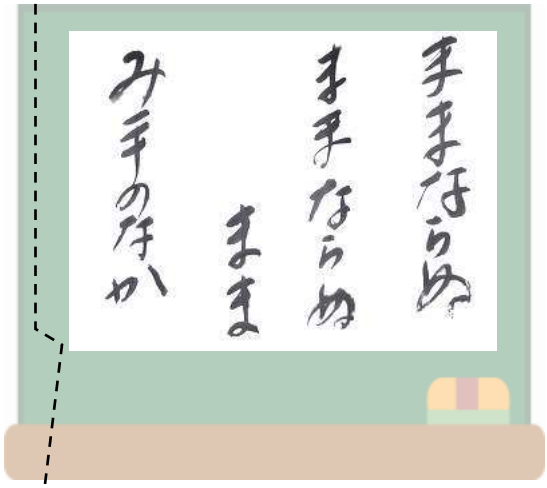
食事（毎日何を食べて居るんやろうか）、水（変わった水は飲まないように）、仲間（仲良くせなあかんよ）、身体（大丈夫か？）、時化（しけ）てきたら如何しているんやろか、母は、いちまだ（一枚田）へ行くと海の見える畦（あぜ）に座り、白波が見えると何時までも眺めているらしい（父の手紙）。母が写真に毎日影膳を据えていることも手紙に書かれていました。有り難い事です。

その母は六十六歳で、親戚の方、在所の方、大勢の見送りのもと旅立ちました。私は南支那海を南下しており、満天の星空を日本の方向に合掌するしかありませんでした。身重だった家内も私の留守中の出来事で大変だったと思われます。母の葬儀が、現住職様の最初の葬儀だった事を後に聞きました。

あれから四十二年が経ちました。母からの手紙は、この一通だけでした。残しておいたつもりが今は何処を探しても無いのが残念です。四月に大遠忌の御縁で帰敬式に参加する事が出来、法名を頂きました事を報告しました。両親は、常々機会があったら「おかみそり」を受けておきなさいと言っていました。

今、元気で暮らせる日々、お蔭様の一言、合掌。

山門掲示板



私たちは毎日愚痴が出ない日はありません。思うようにならないと暗い顔をしています。それは私たちは毎日煩悩いっぱいに自分中心に生きているからです。世の中思い通りになれば、よろこびを感じ、思い通りにならなければ不満が爆発します。私たちの心の中をもしビデオに撮ったら人に見せられるでしょうか。自分も恐しくて見られないでしょう。

お正信偈のなかに「邪見憍慢の悪衆生、信楽受持すること、難の中の難、これに過ぎたるはなし」とあります。私たち邪見憍慢のものは、如来さまから信心をいただくことなど不可能だというのです。私は正しいと思っているのですから、如来さまのお心を頂くことなどできません。また私たちは「生老病死」のいのちを生きています。この身も私の思い通りになりません。お釈迦さまは「人生は苦である」といわれました。「娑婆は思い通りにならないものだなぁ」とうなずいていくのが仏法です。（住職）

『正信偈』に先輩の感動あり！

印度西天之論家　中夏日域之高僧
顕大聖興世正意　明如来本誓応機

読み方

印度西天の論家、中夏・日域の高僧、
大聖興世の正意を顕し、
如来の本誓、機に応ぜることを明かす。

意味

インドや中国、日本の先輩僧侶たちは、お釈迦さま（大聖）がこの世で何をお説きになられたのか、その核心を明らかになさいました。

そして、如来の誓願は、どんな生き方をする人にも等しく開かれていることを明らかにされました。

★お釈迦さまが説かれたことって言ったら「戒律を守りなさい」「善いことしなさい」じゃなかったの？核心って何？

素朴な疑問
病室の番号 ４と９

病室から４と９が嫌われるのは、「死」「苦」を連想するからですよね。でもね、204 号室は無いのに 401 号室はあったりします。４階は４階ですもん。これ、驚くべきことに、最先端の医療を導入している大病院の話です。この矛盾、人間の弱さ、全部受け止めてひっくり返す面白い教え、聞いてみませんか？(^-^)

妙 法 名に育てられる

＜読み方＞…ミョウ
＜意　味＞…大和言葉では「たえ」といい、人の知恵を超えていることを意味します。想像もできないほど不思議なことなのに、感動やまぬほど素晴らしいこと。それは「仏の願い(愛)」のことです。例えば 2001/11/19 の流星雨。流れに流れる雨のような流星。現実なのに人知を超えるもの。絶対あります！

☆　除夜の鐘・お正月　参拝のお誘い　☆

11/28～30 御正忌　12/31 除夜の鐘　1/1 お正月　お気軽にぜひお参り下さい！

発　行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

次世代の方、分家された方に！
お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。